シャワールーム

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シャワールーム

【Ｎコード】
Ｎ６５３３Ｏ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
ある学校の女子寮でシャワールームを使った生徒が消える事件が起こっていた。事件の解決を依頼された本郷と役が突き止めた事件の真相とは。二人の探偵が今度は奇怪な謎に挑みます。

第一章

シャワールーム

今とある高校の女子生徒の寮でだ。深刻な問題が起こっていた。寮なので当然シャワールームもある。最近どの学校もそうした設備を充実させてきている。

しかしそのシャワールームの右から二番目の場所を使うとだ。使った生徒が姿を消すのである。

それも一人や二人ではない。何人も、である。学園の中でこのことは噂になり誰もが顔を見合わせればひそひそと話をする。当然ながら学園の上層部も頭を悩ませていた。

それでだ。学園側としても最早この問題を看過できなくなりだ。事件を解決する必要が生じた。それで事件解決の為に彼等が呼ばれたのであった。

「それで私達にですか」

「この事件を」

「御願いします」

背の高い白髪のスーツの男が茶色の髪を左右で分けてトレンチコートにスーツの涼しげな顔立ちの男と黒髪を短く刈ってジャケットと黒いジーンズの精悍な顔の二人の青年に言っていた。

歳はトレンチの男の方が少し上の様である。その二人に言ったのである。

「その為に御呼びしたのですから」

「手掛かりとかは何もありませんか」

トレンチの男が白髪の男に問うた。

「教頭先生、それは」

「残念ですが」

教頭と呼ばれた彼はだ。首を横に振って答えたのだった。

「むしろあればです」

「俺達に早速教えていた」
今度はジャケットの男が言った。
「そういうことですね」
「その通りです。本当にそうしていました」
「そうですか」
「それで御二人に全ての解決を依頼させてもらいました」
教頭先生はまた二人に話した。
「役清明、本郷忠」
まずはトレンチの男を見た。それからジャケットの男だった。
「御二人にです」
「わかりました。それではです」
「この事件絶対に解決させてもらいます」
二人は真剣な顔で答えたのだった。
「そういうことで。では早速」
「やらせてもらいます」
「御願いします。それでなのですが」
教頭先生は自分の向かい側に座る二人に対して告げた。彼等は今学園の応接間にいる。絨毯の部屋の黒い皮のソファーに座ってだ。そのうえで話をしていた。
「ただ。場所が問題でして」
「寮ですね」
「それも女子寮」
「男性である御二人にはそこが問題になりますね」
こう言うのであった。
「そうですね」
「ええ、それはわかっています」
「それもよく」
二人はそのことについてはすぐに答えた。
「ネックになりますね」
「捜査にあたっては」

「ですがそれで御願いします」
教頭先生は頼み込む口調になっていた。
「ここはどうか」
「ええ、だからこそここにいますし」
「喜んで」
こう答える二人だった。
「やらせてもらいます」
「それで」
「さて」
そしてであった。ここで役が言った。
「早速捜査ですが」
「それは全てお任せさせてもらっていいですか？」
本郷もこう言ってきた。
「俺達に」
「ええ、それは既に御聞きしています」
教頭先生の言葉は実に簡潔なものだった。
「貴方達の捜査の仕方は」
「では話が早いですね。それでは」
「全てやらせてもらいます」
こう話してであった。二人は早速捜査をはじめた。そうしてだった。
役と本郷はすぐに校舎を出た。そしてそのうえでだ。その女子寮に向かった。
女子寮は校舎の左手にあった。右側には男子寮がありそれで校舎を挟んでいる形になっていた。二人が向かうのは当然その女子寮だった。

第二章

そこは校舎と同じ造りで素っ気無いものだった。本当に校舎に見える五階建ての建物である。二人はその寮の前に立っていた。

そしてだ。まずは本郷が言った。

「女子寮っていいますからさそかじみらびやかなものだって思ってたんですけれどね」

「予想外だったか？」

「ええ、本当に」

その通りだと役にも言う。憮然とした顔でだ。

「期待外れでしたよ」

「しかし中は違うと思っているな」

「期待しています」

本郷の目が光った。

「実際に」

「では行くとするか」

「はい、それじゃあ」

こうしてだ。中に入った。すぐに初老の気難しそうな感じの女が出て来た。度の強い眼鏡に藪睨みの目をしていて肌も疲れている。背中は曲がっている小太りな女だった。服はジャージで全体として野暮ったい印象もある。

彼女はだ。まず名乗ってきた。

「管理人の前迫です」

「前迫さんですか」

「はい、前迫清美といいます」

こう名乗るのだった。

「宜しく御願いします。お話は聞いています」

「そうですか。早いですね」

「教頭先生から聞いています」

役に対しても答える。
「既に」
「では捜査を任せてもらいますね」
「俺達に」
「はい」
二人の言葉にもすぐに答えてきた。
「それはもう」
「ではすぐにやらせてもらいます」
「そういうことで」
そうしてだった。二人は管理人の案内を受けて寮の中の捜査をはじめた。まずはその問題のシャワールームだ。そこの右から二番目である。
だがそこを見てだ。本郷が怪訝な顔で言った。
「見たところは」
「そうだな」
二人でそのルームに入る。中から密閉される個室であり曇りガラスの扉で完全に遮断される場所になっている。中にそのシャワーがある。
白いそこには確かにおかしなところはない。二人はここで管理人の前迫に問うた。
「あの」
「一ついいですか？」
「はい？」
前迫は不機嫌そのものの言葉で返してきたのだった。
「何でしょうか」
「ここで何人消えました？」
「四人です」
こうその不機嫌な声で答えるのだった。
「四人消えています」
「四人ですか」

「ここで」
「中に入ってそれで消えました」
「成程」
本郷はここでシャワールームのその白い扉や天井を手で叩いてみた。床もだ。そのうえで険しい顔になる。しかしであった。
「ルームには変わったことはありませんね」
「そうだな」
役は密かに式神を放った。しかしであった。
そこには何もなかった。全く、である。
そしてそのシャワールームが並べられている部屋全体も調べた。ところがそこにはだ。何の異変もなかった。何一つとしてだ。
「ここには手掛かりはないな」
「ええ、確かに」
本郷は役のその言葉に頷いた。
「何もありませんね」
「本当にな」
「ここには何もありませんよ」
前迫はまた不機嫌な声で二人に言ってきたのだった。
「ここにはね」
「ここには、ですか」
役の眉がだ。ぴくりと動いた。
本郷もである。二人は彼女の今の言葉からあることを悟ったのだ。

第三章

しかしそれを隠してだ。ここは彼女に頷いたのであった。
「わかりました」
「それでは」
「そういうことだね」
前迫の言葉は追い払う様なものだった。
「さっさと行って下さい、調べる場所は他にもあるでしょうし」
「はい、それでは」
「これで」6
二人はこう話してだ。そのうえで今は女子寮を後にしたのだ。
二人は今は校舎の中にいた。そうしてである。
そのうえでだ。二人で話をしていた。今は校舎の中を歩き回っている。
「間違いないですね」
「そうだな。あの女だ」
まずは本郷が言った。そして役は彼のその言葉に頷いていた。
「あの女が犯人だ」
「ええ、間違いありません」
「ここには、と言った」
役が指摘したのはこのことだった。
「知っているということだ。失踪した女生徒達のことをだ」
「そういうことですね。ただ」
「ただ？」
「証拠は女子寮にはない」
それは言うのだった。
「間違いない」
「しかし何処かにありますね」
「そうだ、証拠はある」

役は断言していた。今二人は学校の裏にいる。緑の木々が周りにあり人気はない。そして向こうにはプレハブの粗末な小屋があった。

役はそれを見てだ。本郷に話した。

「本郷君」

「はい」

「あれをどう思う」

「あの小屋ですか」

「どうやら今はもう使われていないな」

「ええ、そうですね」

それを聞いてだ。本郷も静かに頷く。

「その通りですね」

「傍から見ればな」

ここで役は言葉を付け加えた。

「そう見える」

「しかし実際は」

「少し見てみるか」

役はここでだ。一枚の札を取り出した。黄色い札である。

それを投げるとだ。札は黄色い小鬼になった。それが小屋の中に入ったのだ。

暫くしてからだ。役は言った。

「成程な」

「証拠発見ですね」

「そうだ、あの中だ」

その小屋の中だというのだった。

「間違いない」

「怪しい場所に怪しいものがあった」

本郷は役の言葉を受けて述べた。

「そういうことですね」

「そうなる。だがかなり面白い趣向になっている」

「面白い、ですか」
「確かに小屋にその証拠はある」
まずはこのことを話した。
「しかしそれでもだ」
「それでもですか」
「小屋の中にはない」
こう言うのだった。言葉は相反するものになっていた。しかしここでまた話すのだった。
「その下にある」
「下にですか」
「まずは中に入ろう」
それからだった。そのうえでだった。
二人は小屋の前に来た。そのうえで本郷が刀を出して小屋の扉を断ち切った。その小屋の中はがらんどうで何もなかった。何一つとしてだ。

第四章

だが床にだ。明らかにおかしな場所があった。開かれていたのだ。
「小鬼を使ったのですね」
「そうだ、小鬼が開けた」
役はこう本郷に話す。小屋の中央に下に続く扉がありだ。そのうえで下に続いていた。そしてその下からだ。不気味な匂いがしてきていたのだ。
その匂いからだ。本郷は言った。
「残念な結果ですね」
「そうだな。消えた女生徒達はあの中だ」
「中に入るしかありませんね」
「まずはな」
こう言ってであった。二人は下に降りた。木造の階段を下りてその下に行くとだ。そこにあったのは無惨な屍達であった。それがあったのだ。
どの屍も陰惨な有様だった。首を切られそれが天井から吊るされている。どの顔も無念な顔で目を見開き恨めしそうな顔をしている。そして口からは血を流し苦悶と断末魔もそこに見せていた。
本郷はそれを見てだ。目を顰めさせて言った。
「生きているうちに首を刎ねられたね」
「そうだな。間違いないな」
役もその言葉に頷く。
「それはな」
「間違いありませんね」
「そしてだ」
役はここで周囲を見回す。するとであった。
何か鋭利な刃物で切られた手足があった。手首も足首もばらばらになりそれが転がっていた。乳房は食い千切られ前にも後ろにも棒

や竹が突っ込まれていた。しかも腹が断ち切られだ。内臓が引き摺り出されていた。
そしてだ。それを見るとであった。
本郷は難しい顔でだ。言うのだった。
「サイコ殺人ってやつですね」
「思えばおかしな顔の女だった」
「重度の人格障害者の顔ですね」
役もだ。そう見抜いていたのだ。
「間違いなく」
「まずは警察に連絡をしようか」
「そうですね。死体のことは警察のことです」
「そしてだ」
役は冷静にだ。言葉を続けていた。
「そのうえでだ」
「はい、あの管理人のところに行きますか」
「私の出番はここで終わりだ」
役は冷静に述べた。
「しかしだ。これから」
「はい、これからは俺ですね」
「シャワールームからどうして消したかだ」
それが問題だというのである。
「それが問題になる」
「あの管理人を押し退けてそのうえで調べます」
本郷は目を怒らせていた。その陰惨な四つの死体を見てである。胴体と頭の数がそれぞれ四つであった。それで数を把握したのである。
「それでいいですよね」
「好きにすればいい。君に任せる」
「はい、じゃあ」
こう話してだった。まずは警察に連絡してだ。そのうえで寮に戻

った。
既に警官達が来ていた。前迫はその彼等を憎々しげな目で見据えながらやって来た二人に対しても言う。その醜い顔で。
「これは一体どういうことですか！？」
「どういうことって答えは一つだろうに」
「一つ！？」
「ああ、一つだ」
本郷が彼女に言っていた。今彼等は寮の中にいる。警官達と共にだ。
「犯人がわかったんだよ」
「私だっていうのですか！？」
「その通りさ。今小屋の中も調べられてるぜ」
また彼女に告げた。
「これでわかったな」
「それで私がやったっていうんですか」
「ああ、そうさ。あんたがやったんだ」
こう言ってであった。そうしてだ。
あのシャワールームに向かう。役に警官達も一緒だ。遅れて前迫も連れて行かれる。

第五章

そしてそこに入ってだ。彼は右から二番目のそのシャワールームに入った。そのうえで、であった。
「ここのシャワーにこそ秘密があったんだよ」
「シャワーに！？」
「というと」
「このシャワーのホースの中にお湯で溶ける睡眠薬を入れていたんだよ」
ホースを手に取って役と警官達に話す。
「それは調べればわかるさ。ホースの中をな」
「ホースの中をですか」
「そこから」
「ついでに管理人さんのいる管理人室、それに自分の家かな」
その睡眠薬がある場所も言うのだった。
「そこもだな」
「そこもですか」
「では」
「話はこれで終わりだな」
今度は前迫を見ての言葉であった。
「後は細かい事情はじっくりとわかることだ」
「よし、それでは」
「今から」
こんな話をしてであった。その後でだ。
前迫は連続殺人犯として逮捕された。事件はその猟奇性によってネットやマスコミを賑わせた。あるサイトではサイコ殺人として扱われ人々の心に嫌な記憶として残った。
その騒ぎが終わってからだ。本郷は役に対してだ。こう話す。
今二人は昼食を食べていた。ラーメンを食べている。京都ラーメ

ンを食べながらだ。そのうえで役に対して言うのであった。
店は何処にでもある普通の店である。というよりかは古典的ですらある。品書きは手書きで壁にあり丼は中華風の渦がある。しかもナルトにも渦がある。ラーメンまで古典的であった。
その中でだ。彼は役に対して言うのだった。
「しかしあれですね」
「あれか」
「美人が憎いですか」
こう彼に言うのだった。ラーメンを食べながらだ。
「そしてそれと共に」
「陵辱したい存在でもあった」
「憎いのに、ですか」
本郷は首を傾げさせた。そうしながらラーメンの麺をすすっている。
味はかなりいい。卵麺でありながらコシもしっかりしている。内装はあまり派手ではないがその味はだ。派手ではないが見事なものだった。
「それでも欲情するんですね」
「憎いからこそ汚したくなる」
役はラーメンの中のもやしを箸に取っていた。
「そういうことだな」
「それで、ですか」
「あの女は昔からああした顔に態度だったらしい」
「成程」
それを聞いてだ。また話す彼だった。
「それじゃあもてませんね」
「そう思うか」
「ええ、絶対に」
本郷は断言さえした。
「顔ならまだいいですがね」

「性格か」
「陰気で何か陰険でしたし」
要するに暗いというのである。
「それじゃあとても」
「そうだな。それでだ」
「皆から相手にされずにですね」
「それで性格がさらに捻じれてだ」
「ああなった、ですね」
本郷は冷めた調子で述べた。
「そういうことですね」
「冷静だな」
「こうした事件の常ですからね」
今度は顔を顰めさせての言葉だった。
「犯人の」
「そうだな。常だな」
「それでああした殺人を犯しますか」
「それもだ。そうした殺人鬼はだ」
「俺達の中にいる」
本郷の言葉はここでは剣呑なものになった。

第六章

「そういうことですね」
「その通りだ。そうしたサイコ殺人だな」
こうした場合の事件の呼び名だ。今がそれだった。
「それになる」
「サイコ殺人は人の中にあってこそ起こる」
「そうした意味ではどの殺人事件も同じだな」
「ですね。殺人は人がいるからこそ起こる」
自明の理であった。殺人は相手があってこそである。聖書のカインとアベルの例を見るまでもない。誰もいなければそんな事件は起きないのだ。
「そういうことだ」
「ええ、それでああいう奴もですか」
「出てしまう」
また話す役だった。
「異常者もいるのがこの世の常だ」
「この世の」
「そうなる。私達がいつも相手にしている」
「ええ、化け物連中とはまた勝手が違いますね」
本郷の顔が曇っていた。こうした話をしていると自然に、であった。
「何か。嫌な感じがありますね」
「嫌か」
「連中よりグロテスクな性格はしています」
前迫ではない。そうした殺人鬼全体を指し示しての言葉だ。
「皮だけは人間ですがね」
「皮だけはか」
「だから余計になんですよ。嫌な気持ちになります」

人間の姿だからである。それをだというのだ。
「中身が化け物よりも醜い場合もあるから余計に」
「こう考えるといい」
ここで役はまた話した。
「心を見ればいい」
「心をですか」
「そうだ、心をだ」
こう本郷に話す。今はラーメンのスープをレンゲですくってそのうえで口の中に入れている。あっさりとした京都らしい味のスープだ。
「心を見るのだ」
「心をねえ」
「見ればわかる。外見はどうとでもなる」
「ええ、あの女は」
本郷はここでだ。前迫に話を戻して述べた。
「あれですね。心があまりにも醜かった」
「外見はどうでもよくなるな」
「はい、俺は最初からそう言ってましたっけ」
「言っていた、そうなる」
「わかりました、っていうかあらためて気付きました」
こう述べる本郷だった。
「そういうことですね」
「そうなる。それではだ」
「ええ、事件は終わりました」
本郷はあっさりとした声で言い切った。
「じゃあ今からは」
「どうする？」
「食べますか」
今言うのはこのことだった。
「ラーメンを」

「そうだな。何はともあれ事件は終わった」
役も彼のその言葉に頷く。
「それならな」
「はい、それじゃあ」
本郷はここで自分のラーメンを食べ終えた。そのうえでだ。
「ウォーミングアップも済みましたし」
「一杯目だったのか」
「そうですよ。ここからが本番ですよ」
笑いながら役に言うのであった。
「これからですよ」
「それで何を食べるつもりだ」
「あれですよ」
笑いながら店の壁を指差す。そこにはだ。
特大ラーメンとあった。巨大な丼の中に麺が満ちている。具もかなりのものだ、それを指差したうえでだ。不敵な笑みを浮かべて言うのであった。
「あれを食べます」
「十人前だな」
「二十分以内に食べられたらただですし」
そのことも言うのであった。
「今から」
「頑張ってくれ」
その彼に一応は応援の言葉をかける役だった。嫌な事件の後は日常が二人を迎えた。そしてまた事件に向かうのであった。

シャワールーム　　完

２０１０・６・４

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6533o/

シャワールーム

2010年11月1日22時41分発行